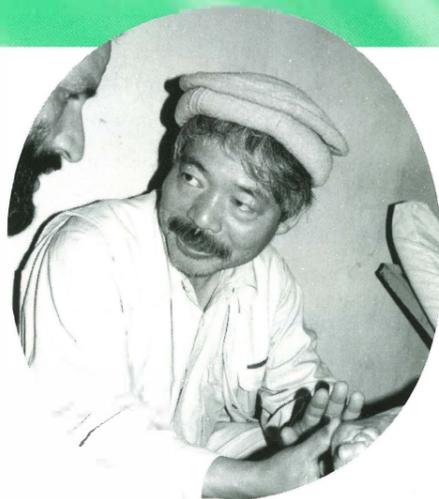


アフガニスタン 危機の実像 ——地上を生きる現場から



医師

中村 哲

福岡市生まれ。九州大学医学部卒。専門は神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境の州都・ペシャワールに赴任。以来18年にわたり主に貧民層の診療に携わる。86年よりアフガニスタン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、山岳部無医地区での無料診療にあたり、98年には基地病院PMSをペシャワールに建設。

2000年からはアフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保事業を实践。さらに今春からアフガニスタン東部の山村で長期的復興計画「緑の大地」プロジェクトに着手。現地スタッフ約820名、日本人ワーカー約20名。年間診療数約28万件。著書は『医者井戸を掘る』『辺境で診る 辺境から見る』(ともに石風社)『ほんとうのアフガニスタン』(光文社)など多数。

大旱魃に挑む

野外の気温が50℃に迫る炎天下、200名の村民、PMS(ペシャワール会医療サービス)の職員、若い日本人ワーカーたちが真っ黒になって汗を流す。シャベル、ツルハシを振るって溝を掘り、ブルドーザーがうなりを上げて土石をかき除ける。遠くでは轟音と共に岩石塊が爆破される。熱風と砂塵がしばしば作業を中断させる。

5月中旬、やっと灌漑水路計画が本格化した。行く手に広がる漠々たる荒野が、かつて豊かな田園だったことを信ずる外国人は少ないであろう。アフガニスタン2千万国民の9割を占める農民たちにとって、最も深刻なのが旱魃である。4年目に入っても治まる気配なく、東南部では依然として各地で砂漠化が進行している。

3年前からペシャワール会は東部のニングラハル州全域に飲料水源確保を展開、全力を注いできた。2003年6月15日、井戸やカレーズ(地下水路)の総作業地が1千ヶ所に達し、うち932ヶ所で水を得て、多くの村民たちの離村・難民化を防いできた。しかし、飲み水や診療所だけでは生きてゆ

けない。そこで、大規模な灌漑計画を加えることになった。

旱魃は地球温暖化と明らかに関係している。案外知られていないが、アフガニスタンは山の国である。乾燥した中央アジアの同地で、2千万の人口を養うのが大山脈ヒンズークッシュの万年雪である。

冬の積雪は、氷河を蓄え、夏に溶け出して沃野を提供する。いわば天然の巨大な貯水槽である。幾千万年もの間、それは無数の生命を支え続けてきた。それが、標高4千メートル以下では完全に消えつつある。せっかく積もった雪が初夏までに流れ去り、年々夏の雪線が上がり、所によっては氷河の崩落が起きはじめている。

大旱魃は、降雨(雪)量の減少よりも、万年雪という貯水槽の消滅が主な原因としか思えない。そこで私たちが立てた戦略は、1)比較的低い山の雪に依存してきた地域には無数の井堰・溜池で貯水し、2)万年雪が残る5千メートル級以上の山から流れ出す河からは傍流を引き込む、ことである。これ以外に生き残る策なしと見て、「灌漑・15ヵ年計画」が開始された訳である。

土地に合った建設技術

その第1弾として始まったのが、現在、取り組んでいる用水路建設である。全長16キロメートルを1年で通水、3年以内に約2千ヘクタールを潤すことを目指す。旱魃



▲井堰を作るための作業

の実情は凄まじく、当初の予定灌漑面積を拡大。流量を毎秒3トン以上、小麦・トウモロコシ・米の予想生産高を最終的に約2万トン以上に引き上げる予定で、実現すれば、成人15万人を養うことができる。

水路は、水面幅4~5メートル、トンネル21ヶ所、水道橋1ヶ所、取水口には二重の水門をつけて備える。作業工程は、大半が盛り土、植林、石組み、蛇籠(鉄線の網に石を詰めたもの)の組合せで、昔ながらの伝統技術である。特別な石工はいらない。山間部の農民は石で見事な棚田を作り、至る所に石積み垣根や家屋が見られる。皆、石の芸術家である。水路に沿う並木は柳・桑の木が普通である。いずれも木陰をつくって蒸発損失を防ぐとともに、深く根を張って土盛りの土手を守る。落葉樹であるから、水路付近は豊富な腐葉土をつくり、有機質を川に送る。いわば肥料の生産工場でもあるのだ。

地元にないものと言え、崖地の岩盤数ヶ所をダイナマイトで削ったり、道路をくぐる暗渠、取水口部の沈砂地を頑丈な鉄筋コンクリートで仕上げるくらいのものである。また、現地は良質の土、岩石を産する

から、「資材」は掘削作業で豊富に得られる。危険な場所や人力では出来ない一部の作業を除けば、ほとんどがツルハシ、シャベルによる人海戦術である。こうすると、砂漠化した故郷で途方にくれる農民たちは、いくらかでも日当を得て当座をしのぎ、水路が出来た暁には本来の農耕を営むことができる。

近代的なコンクリートの用水路は現地に馴染まない。完成後は見栄えはよいが、地元民が維持・修復できないのである。実際、数年毎に壊れ、あちこちに残骸がさらされている。それだけでなく、村ぐるみの共同作業＝水路のしゅんせつ、補修などがなくなり、伝統的共同体も壊されてゆく。

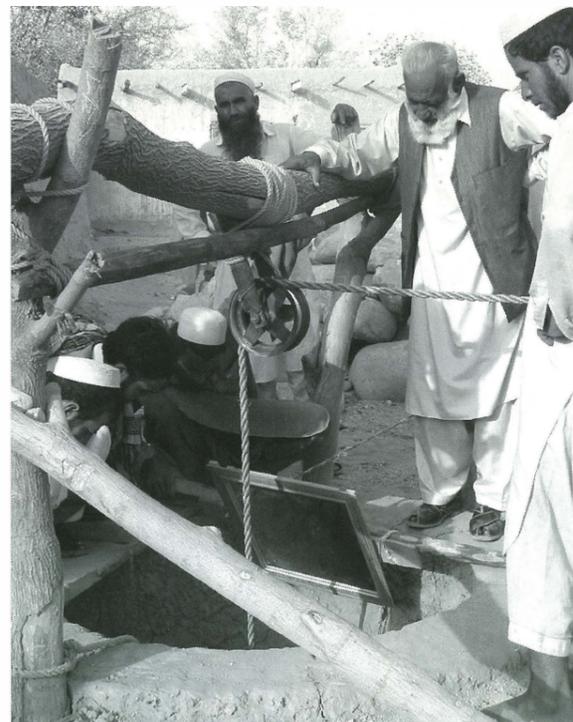
日本の伝統的 貯水技術の輸出

一方、中小河川の水にしか頼れない地域は、更に深刻である。温暖化で冬の積雪が初夏までに鉄砲水のように流れ下り、ひわれた大地が残る。03年6月現在、WFP（世界食糧計画）は「25年来の豊作が期待できる」と発表した。これは余りに楽観的な見方である。今春の雨の量が例年になく多かったことだけを根拠とするもので、「雪の貯水力」を考慮していない。早魃は、4千メートル級の山の麓で著しい。

範は日本の井堰・堤である。日本人だから言うのではない。日本の地図を広げて驚くのは、無数の溜池・堤の存在である。現地と比べれば日本の降水量は10倍以上、一見治水対策が異なるように思われるが、実は共通する条件を備えている。日本も山国であり、全体に、無数の小溪谷と中小河川による農地が圧倒的に多い。表作も米である。米作の要は、初夏の田植えから初秋まで田圃に一定の水を張ることである。堤や井堰は、その歴史2千年、洪水対策とともに、初夏に集中する水を確保するために各地で作られた。

アフガニスタンでも同様に、従来冬に補充される万年雪に頼っていた天然の貯水を、下手で行うことである。こうすれば、ある程度の水を一定に得られ、表作が可能となる。少なくとも小麦・トウモロコシくらいはできる。

「温暖化が向こう数世紀は治まらない」と、専門筋は一致して述べている。それなら尚更のこと、直面する新事態に備え、まず生



▲井戸掘り作業の様子

きることに真剣に取り組むべきであろう。私たちは早速、今秋から取り組みを始める。だが、これも石と土と植林を要素にして、どの村でも真似できるものでなければならない。

架空の不安で 踊らされる世界

本当は空爆＝民主化どころの騒ぎではなかったのだ。昨年パキスタンから帰還した難民は、200万人中170万人と発表されたが、村での暮らしが立たず150万人がUターンしたと言われる。この数字が「復興」の実態を雄弁に語っている。

「アフガニスタン」は表面的な政治現象や教育・文化だけでは捉えきれぬ問題を抱えている。人として共有できる「いのちの問題」なのである。その証拠に、私たちの事業には、恩讐を超えてかつての仇敵同士が協力している。タリバン支持者もいるし、北部同盟軍の元兵士もいる。彼らに共通した認識は、荒廃したアフガニスタンは再び忘れ去られ、結局は自分たち自身が後始末

をせねばならぬということである。

医療団体である私たちが何故、水路を手がけるのか。現地の病気の大半が清潔な飲料水の欠乏と、栄養失調を背景にしている。飢えや渇きは薬では治せない。それに、「地方は危険だ」と外国人は誰も近寄らないからでもある。

同様に、お手軽な軍事・政治的な処方箋で全てが解決すると信じるのは、先進国側の勝手な妄想である。それは飢餓と渇水を一服の薬で癒そうとする魔術に他ならない。その怪しげな処方が世界にもっともらしく受け入れられるのは、恐ろしいことである。

今年6月現在、現地では外国軍への襲撃が活発化し、日本ではイラク派兵＝復興支援の決議が国会で行われようとしていた。対テロ戦争や人道的介入も、復興支援も、現地から見れば、「持てる者の不安の運動」に過ぎない。その不安と幻影が消えるとき、私たちはアフガニスタン以上に貧困な人間の精神を、自分たちの中に見るのかもしれない。



▲完成した井戸から注がれる水



▲農場から望む山々。雪が少ない